



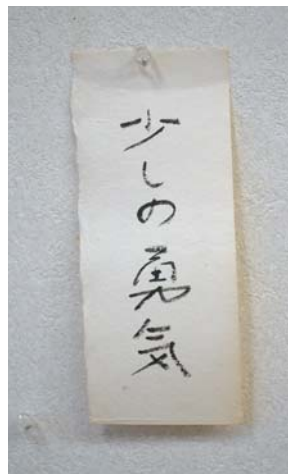
白井久義

名古屋芸術大学 美術学部
 絵画科 日本画コース 教授

1953年(昭和28年)、香川県生まれ。
 78年 名古屋芸術大学 絵画科日本画専攻卒業。
 日春展、日展、グループ展(RON展、閑閑、風の会等)
 で主に活動。
 日春展日春賞受賞、奨励賞受賞。石田財団芸術奨励賞受賞。
 昨年は1年間、中世フレスコ画の研究に、高橋久雄氏(名古屋芸術大学名誉教授)を頼って単身渡仏。
 この4月に帰国したばかり。



マスター ↑↓to アーティスト 【第1回】 <少しの勇氣>



整然と片付けられたガランとしたアトリエ。1年もの間、主を失った部屋は膠(にかわ)の香りこそ満たしていないものの、その気になればいつでも創作に取り掛かれる準備はできていたようだ。忠実な猟犬のように、主の帰還を待ち焦がれていたに違いない。1年間の単身での渡仏を終えて、帰国したばかり。お話は必然的にフランスのことになった。

「周りが師ってというか、すべてが自分のエネルギーになることばかりです。ありがたいものばかりですね」言葉すらままならない異国の地でたった一人。限りない自由と不自由さが同居する環境、その中に身を置き、自

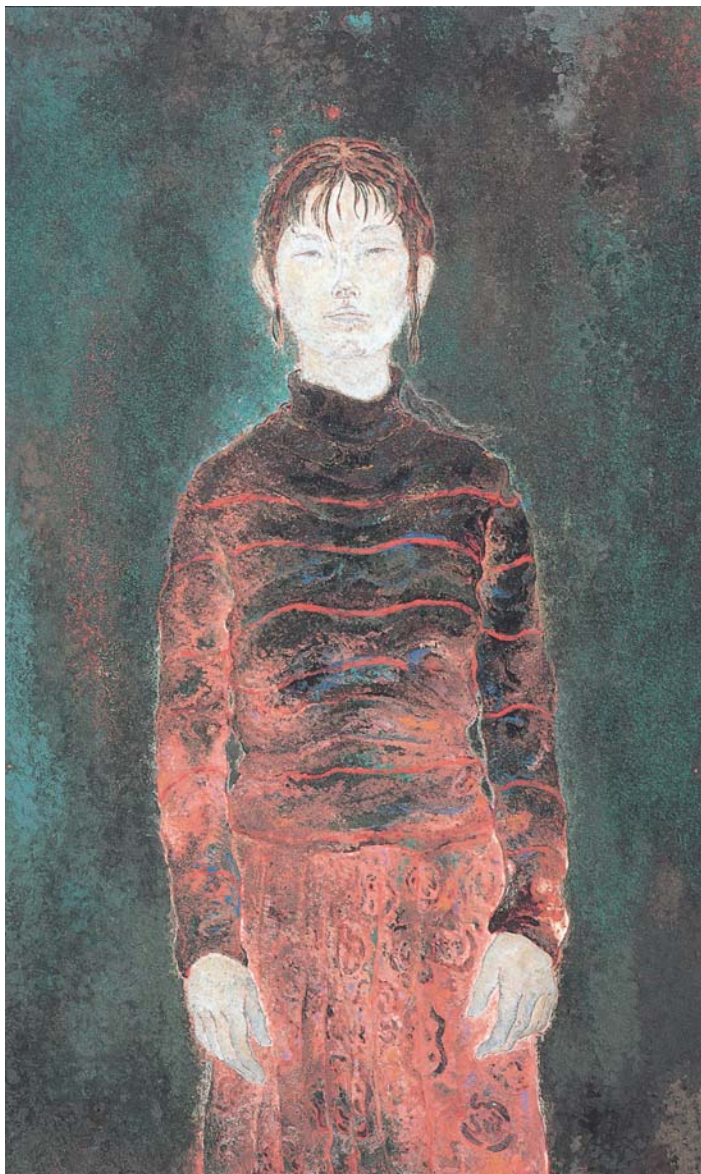
分の生き方について考えることとなった。

「中世のフレスコ画の研究ってことでですけど、それと同時に、絵のこと、人との関係、学生とのかかわり…、自分の生き方について原点に戻ってというか、一度ニュートラルな状態に戻して考えてみたかったです」

「絵を描くのは充実した時間なのですが、とても苦しい作業なんです。絵というのは数学なんかと違って答えがない。答えがないからしんどい。自分の到達点を、その都度その都度、探していかなきゃいけない。それこそ胃が痛くなるほどしんどいんです。

でも、完成して出展すると絵がアトリエからなくなる。壁を見ながら『もう一回悩みたいな』と、快感が押し寄せてくるんです。苦しいけれど幸せなことなんですね」常に考える。手を動かしながら、絵を描きながら考える。自由であればあるほど、その答えも簡単には見つからない。「自分の価値観が揺らぐんです、毎回、毎回。これでええんやろか…って」

日本画とフレスコ画。高度な計画と技術を必要とするフレスコ画は、洋画の世界でもひとつの到達点といえるもの。何故、日本画家とフレスコ画が結びついたのか、その答えは



『女』1997年 162.1×97.6



『時』2003年
130.3×80.3



『まどろむ』2002年
130.3×89.4

明快だった。

「フレスコ画は、水じゃないですか。日本画と洋画の違いって、簡単にいってしまえば絵の具の違いなんです。洋画が油なら、日本画は水。岩絵の具に、水、膠、それから和紙ですね。フレスコ画は水なんです。絵肌は日本画に近いと感じます」洋画の真髄にあるようなフレスコ画が日本画家を魅了する。伺ってみれば合点のいく説明。と同時に、日本画、洋画といった分類を飛び越えた絵画そのものの魅力に気付かされ、また、その世界に身を置き、魅了され、模索し続ける氏の姿も自ずと浮かび上がってくる。「洋画には洋画の素晴らしさがありま

す。でも私は日本画の風合いに、絵の具にも、紙にも、筆にも、惹かれます。膠の匂いはふるさとみたいな感じがするんです」フレスコ画を研究しつつも、自分の中にある何かを探し続ける。

「絵描きは貯金で描いちゃいけない」お話を伺ううちに何度も繰り返された言葉。毎回、新鮮な気持ちで絵に向かい、自分の価値観を問い直す。他人の評価に甘んずることなく、自分に素直に生きることの難しさ。「自分で誤魔化している時って誰しもあると思うんですよ。でも、おかしいなって思ったときに直せる勇気を持つこと。

これが素直に生きることだと思っています」アトリエの壁の片隅に、「少しの勇気」と書かれた紙が貼られていた。絵画への苦悩と喜び、素直さ、勇気、考えること、生きるすべ…。小さな紙にすべてが入っていた。

